

# 唐長安城および洛陽城と東アジアの都城

王 仲殊

中国社会科学院考古研究所

中国古代の長安や洛陽などの都は「都城」と称されるが、1960-70年代に日本の研究者は改めて「宮都」という用語を作り出し、これを以て日本の藤原京・平城京・長岡京・平安京を呼ぶ。80年代以降、一部の研究者は、日本の都が一貫して羅城をめぐるせないで、「都城」という用語をそれらに使えるいと主張し、専ら「宮都」の用語で藤原京・平城京・長岡京・平安京を呼ばなければならないと強調している。

ところが、『日本書紀』の記載によれば、天武天皇十二年（683年）十一月に「凡そ都城・宮室は一处に非らず、必ず両参を造らむ」という詔がある。又『続日本紀』桓武天皇延暦三年（784年）六月の条に「都城を経始し、宮殿を営作せしむ」という記事もある。つまり当時の日本の朝廷の規定により、藤原京・平城京・長岡京・平安京などの都がすべて「都城」と呼ばれるのは疑いもない事実である。それゆえ、「宮都」という新しい用語に慣れない私はやはり、中国の長安・洛陽などの都城と同様に、日本の藤原京・平城京・長岡京・平安京をそのまま「都城」と呼ぶことにする。

1980年代以来、私は「古代日本の都城制度の源流について」、「古代日本都城の宮内に存在した大極殿竜尾道を論ずる」、「古代中日関係史における洛陽の重要性を論ずる」、「唐時代の長安大明宮の麟徳殿が日本の平城京と平安京の宮殿設計に与えた影響について」などの論文を書いて、中国社会科学院考古研究所の月刊誌『考古』に発表してきた。これらの論文の内容を大まかにまとめて、その要旨を以下のように簡単に述べる。

まず第一に、藤原京を始めとする日本の都城の模倣対象は唐時代の長安城と洛陽城であるか、それとも北魏の洛陽城であるかという問題について述べよう。

この問題については、私は終始一貫、690年代に建設された日本の藤原京は、後の8世紀の平城京ならびに790年代以降の平安京と同じく、中国の唐時代（618～907年）の都長安城および洛陽城を模倣して形作られたものであり、北魏王朝（386～534年）の都洛陽への模倣ではないと主張している。

北魏の孝文帝が洛陽を都にし始めたのは490年代のことであった。530年代に、洛陽では激しい戦乱が起って、宮殿・寺院・市場・民家などをことごとく焼き、都はすっかり荒廃してしまっていた。戦火に吞まれ、跡形もなく廃墟と化した北魏の洛陽は、百数十年以後の690年代以降の日本の都城の模倣対象にはなり得ないことは、云うまでもないと思う。

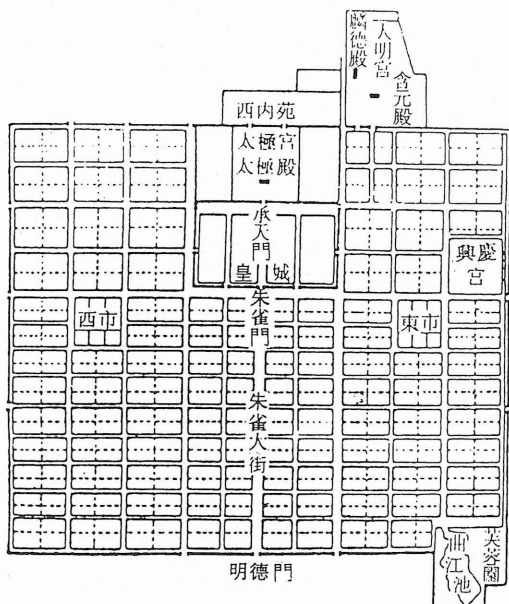
5世紀から6世紀にかけて、日本は中国の北魏王朝との往来がなく、使節を北魏の都へ派遣したことは一度もない。6世紀初期、北魏の宣武帝は都の洛陽城を拡張し、城郭の南正門である宣陽門外の大通りの両側に「四夷館」を作り、四方の各外国からの使節や来賓を迎えて招待した。四夷館の中に、東夷館の別名は「扶桑館」であったため、一部の研究者は、北魏の洛陽

へ日本の使節団の派遣があったと考える。しかし、ここでの「扶桑」の二文字は広く東方を指しているのであって、日本だけに限っているわけでは決していない。「扶桑」は太陽が登りはじめる起点の位置に存在すると考えられていたので、ついには東方を表わす代名詞にもなったのであって、四夷館の中の東夷館を「扶桑館」と呼んだのも、こうした観念の所産に他ならない。東夷館を「扶桑館」と名付けたのは結局、西夷館が「崦嵫館」と呼ばれていることと同じ理屈によっている。というのも、『楚辞』や『山海経』などの書籍に書いてある崦嵫山は日が入る山と認められるからである。

『魏書』東夷伝によれば、北魏王朝と交際があった東夷の諸国として、高句麗・百濟・勿吉・失韋・豆莫婁・地豆于・庫莫奚・契丹・烏洛侯などがあげられているが、倭国は含まれていない。全百二十巻余、計数十万字にわたる北魏一代の正史『魏書』には「倭」の字は、一字も見当たらない。こうしてみると、日本と中国の北魏の間には全くの没交渉であったと云うほかはない。このように北魏の洛陽城は、どうして日本の都城の模倣対象になり得るのだろうか。

開皇元年（581年）隋の文帝は、新たな王朝を創始した。その翌年に、文帝は前漢時代以来の歴代の都だった長安の東南方に新しく「大興」という都城を造営して、京師と称した。大興城は大きな規模を誇っていたが、その所在地である関中地方の袋小路のような地勢を憎んだ隋王朝の二代目の君主煬帝は、中国全土に統制を行き届かせるため、大業元年（605年）改めて久しく打ち捨てられていた北魏の洛陽城跡の西約十八里の地点に新たな都を営み、その規模は大興に勝るとも劣らないものであった。当初「東京」と呼ばれていたが、まもなく「東都」と改称された。つまり隋王朝は大興と洛陽の二カ所の都を営んでいたが、これはいわゆる「複都制」である。私の考証によれば、日本の推古天皇時期の遣隋使として知られる小野妹子が訪問した先は、京師大興ではなく、東都洛陽であった。「日出ずる処の天子、書を日没する処の天子に致す、恙なきや」云々の国書も、洛陽の宮廷で呈上したのである。

610年代の末、唐王朝が隋の後に樹立され、京師大興を「長安」という名に変えたが、東都洛陽の名称は従来のままであった。唐の太宗の貞観四年（630年）から文宗の開成三年（838年）までの間、日本からの正式な遣唐使の派遣は十三回もあった。顕慶四年（659年）、第四回の遣唐使が唐の東都洛陽で高宗に謁見した。麟德二年（665年）、第五回の遣唐使は年末に唐入りした後、翌年正月に行われる高宗自ら主宰の封禅式に参加するため、直接泰山に赴いたかもしれない。この二回を除けば、残りの十一回の正式な遣唐使団の訪問地は例外なくまず



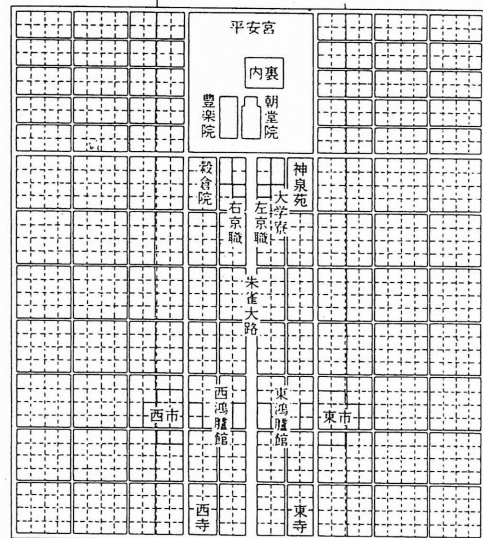
図一 唐長安城布局及太極宮、大明宮位置図

長安であった。とはいえ、洛陽は長安の東に位置するため、遣唐使が長安へ赴く、あるいは長安から帰国する途中には必ず洛陽を経由するので、立ち寄りたりしていたはずである。小野妹子等の遣隋使につづいて派遣された遣唐使は、才識に満ちた数多くの留学生や学問僧を率いて中国を訪れ、唐の都城制度を含め、当時の中国の政治、経済、宗教及び様々な文化事業について念を入れた調査と研究を行った。言うまでもなく、日本の都城の建築様式は唐王朝の長安城および洛陽城を模倣したものである。

唐長安城の宮城は「太極宮」、その正殿が「太極殿」と呼ばれていた。これは当時における日本の都の宮城内に置かれた正殿としての「大極殿」の名称の由来である。660年代、唐の皇帝が太極宮から新しい大明宮に移り住んだため、大明宮が太極宮に取って代わって長安の政治の中核となった。大明宮の正殿は「含元殿」と称され、その特徴として、高い基壇の両側に「竜尾道」と呼ばれる階段が設けられていた。日本の平城京および平安京の宮城内の正殿である大極殿も高い「竜尾壇」あるいは「竜尾道」という基壇の上に建てられていた。これは疑いなく唐の長安の大明宮含元殿の形をまねて造ったことになる。しかし、日本の宮城の正殿は「含元殿」ではなく、ずっと「大極殿」と呼ばれていた。要するに、「大極殿」という名称の採用は660年代よりも以前だったはずである。660年代以降、唐の長安城において、大明宮及びその正殿である含元殿が新たな最重要宮殿となったが、この時点では日本の「大極殿」の命名はすでに行われていたため、この名称が日本の宮殿制度の伝統としてその後もずっと受け継がれたのである。

周知のように、犬上御田鎌を大使とする第一回の遣唐使は貞観五年（631年）に唐王朝の京師長安を訪問し、唐の太宗に謁見したが、謁見は必ず太極宮の太極殿で行われた。これこそ日本の宮城内の正殿を「大極殿」と名づけた最も重要かつ直接的な理由であろう。『日本書紀』に「大極殿」という名称が初めて現れるのは皇極天皇四年（645年）の記載の中である。当時、日本はまだ正規な都城を有していなかったが、天皇の住まいである飛鳥の板蓋宮は国の政治的中枢としての役割を果たしていた。『日本書紀』の中で、この板蓋宮については「十二の通門あり」云々のやや誇張しこじつけたような表現もあるが、正殿を「大極殿」と称したという記載には、それなりの信憑性があると思われる。

平城京と平安京について言えば、宮城の正殿が「大極殿」と命名されたほか、宮城の南正門は「朱雀門」と呼ばれ、長安の皇城の南正門朱雀門との同じ名称であり、また「朱雀大路」や「東市」「西市」などの大通りや市場の名称も長安の同じ場所名から来ている。天皇が居住した内裏の建物は、日本の伝統にのっ



図二 平安京復原平面図

とって白木の掘立柱を用い、屋根は桧皮葺きであったが、平城京の宮殿、寺院などの重要な建築物の構造やスタイルは、土台から柱、壁、屋根まで、中国唐時代の都の相対応した建築物を真似て造られた。そのうち、前述の大明宮含元殿の竜尾道をモデルに造られた大極殿竜尾壇（あるいは竜尾道）は最も代表的であった。都全体の区画からみれば、平城京と平安京の宮城は都の北端中央に位置し、朱雀大路は京城の中央を南北に通じ、都を左京と右京に分ける。他の多くの大路、坊と市も基本的に左右対称的に整然と区画されている。これは唐の長安城の形状と区画にきわめて似ているから、唐の長安城は日本都城の模倣対象であるに違いないと確認できる。

790年代以降建設された平安京は古代日本の都城制度の集大成とも言えよう。その宮城平安宮における最も重要な宮殿は三つあり、「朝堂院」「内裏」それに「豊楽院」である。朝堂院は宮城南部の中央に設置され、その正殿である大極殿は長安大明宮の含元殿に相当し、日本の天皇が盛大な典礼や儀式を行う場所である。朝堂院の北側のやや東に寄ったところにある内裏は天皇の居住区域であり、その中の紫宸殿は長安大明宮の紫宸殿に相当し、天皇がここで重要な政務を見る。豊楽院は朝堂院の西側に位置し、天皇が各祝日に臣下を率いて宴会を行ったり、渤海国からの使節を招待したりする場所として使われ、大明宮の麟徳殿と同じような役割を果たしている。

唐の長安城の全体が東西に横長の長方形であるのに対し、平城京など日本の都城は南北に縦長の長方形である。これは無視できない違いである。長安では朱雀大街の両側にある区画が正方形に近い数少ない坊を除けば、ほとんどの坊は東西方向に長い長方形である。しかし、日本の都城では、すべての坊が正方形をしている。ここにも両国の都城制度の違いが見受けられる。この二点はもし日本独自の考えによって出たものでなければ、唐の洛陽城に答えを求めることができる。近年の発掘調査によって、唐洛陽城の東側城壁は長さ7321メートル、北側の城壁は6138メートル、したがって都城全体のプランはほぼ南北に縦長の長方形となっていることが分かった。長さとの比率は5：4で、平城京主体部分の平面の形にきわめて近い。唐の韋述が著わした『兩京新記』の記述によれば、洛陽の坊はいずれも三百歩平方だということが分かった。実際の調査でも洛陽の多くの坊は確かに正方形であることが裏付けられている。

平安時代（794-1192年）に入ってから、唐の洛陽城は平安京の形状や街区構成におお影響力を持っており、しかもその度合いはさらに強められた。平城京と比べて、平安京には「外京」が設置されておらず、都城全体の平面の形は整然とした南北方向に長い長方形で、縦横の比率はいつそう洛陽城に近くなっていた。平安京の70余の坊の中で、北端の「北辺坊」を除く他の68の坊の平面の形はいずれも正方形となっており、洛陽の大多数の坊と同じである。

平安京では、宮城南側にある隣接した四つの坊が一つの名前を共用し、宮城の東西両側にある坊は、六つが一つの名前を共用していた。全体で17ある坊名のうち、北端の「北辺坊」「桃花坊」と右京南端の「延嘉坊」「開建坊」を除けば、他の「銅駝」「教業」「宣風」「淳風」「安衆」「陶化」「豊財」「毓財」の八つの坊名はすべて洛陽から来ており、「永昌」「崇仁」「永寧」「宣義」と「光徳」の五つの坊名は長安から来ている。これから見ると、平安京の坊名の採用には、長安よりも洛陽の影響が強かったと言える。



日本の都の宮城は唐時代の長安・洛陽の宮城と皇城との融合体だと言える。宮城の門の名称を取り上げてみれば、藤原京の宮城門は時には「皇城門」とも呼ばれ、平安宮の南門は長安の皇城南門のゆかりで朱雀門と、朝堂院の南門は洛陽宮城の南門にちなんで応天門と呼ばれていた。長安の宮城の南門の名称は承天門だったが、平安宮朝堂院の南門は承天門ではなく応天門と呼ばれていたのは、平安京の各種の制度における洛陽の影響力が強かったことを示している。

中国の都であった洛陽は、平安時代の日本では特別に重視されており、「洛陽」という名称が平安京の代名詞に使われるほどであった。前述のごとく、藤原京・平城京などと同様に、平安京は朱雀大路を中心線として都城全体が左京と右京に分けられていた。平安時代には、左京が東にあったため、「東京」と呼ばれ、そして西にあった右京は「西京」とも呼ばれていた。中国では、早く漢の時代から、洛陽と長安にはそれぞれ「東京」と「西京」の名称があり、唐の時代までその名称が受け継がれたため、平安京の左京は「洛陽」、右京は「長安」とも呼ばれた。しかし、右京は地理的に低湿で、経済状況も低迷していたのに対し、左京では貴族・大臣らの邸宅や天皇の「里内裏」などが集中し、大変繁栄ぶりを見せていたため、「長安」という名称は徐々に人々の記憶から薄れ、「洛陽」が次第に平安京全体を言い表わすようになった。醍醐天皇延喜二十年（920年）、有名な詩人である大江朝綱は朱雀大路の西側にあった鴻臚館で帰国する渤海の大使裴璆を見送って、「曉鼓声中出洛陽」という漢詩を作った。これは遅くとも920年代以前に、「洛陽」が既に平安京全体の代名詞になったということを物語っている。鳥羽天皇永久四年（1116年）に勅撰した『朝野群載』という漢詩文集の中には、中国の『晋書』文苑伝に出てくる「洛陽紙貴」の故事を引用して、著作が人々に好まれ筆写されたことを喩えたくだりがある。しかし、ここでいわれている「洛陽」は、実際には日本の平安京を指す言葉であった。このように、「洛陽」にちなんで、平安京は「京洛」「洛都」、あるいは「洛中」とも呼ばれた。

12世紀末、日本が中世の鎌倉時代（1192-1333年）に入ると、「平安京」という名称はほぼ使われなくなった。ただ天皇の宮室がまだ残っていたため、平安京はそれ以後も「京都」と呼ばれ、今日に至っている。当時の京都では、「京洛」「洛都」「洛中」などが美称として使われ続け、しかも日本各地から京都へ行くことを「上洛」あるいは「入洛」と言い、それが近世、17世紀以降の江戸時代（1603-1867年）まで変らなかった。明治元年（1868年）に江戸が東京と改名され、翌年に日本の首都となり、天皇も京都から東京へ居を移した。しかし、日本では今日に至っても、京都への旅を古い時代にならった「上洛」あるいは「入洛」という言い方が残っている。

唐の長安城および洛陽城が日本の都城に与えた影響に関する私見の叙述は、これで一段落ついたが、次にその韓半島への影響について述べることにする。この前に、まず唐の時代における中国と高句麗・百濟・新羅三国との交渉をめぐる少々詳しく述べなければならないと思う。

6世紀後期、朝鮮半島北部を本拠にしていた高句麗は、遼河以東の広大地域をも領有し、強大な国力を持っていた。高句麗は中国と境を接していたから、争いの発端は絶えることなく、とくにその遼西への攻略は中国側の看過できないところだった。開皇十八年（598年）隋の文帝は高句麗征討に乗り出したが、何らの成果もあげずに撤兵を余儀なくされた。大業七年

(611年)から十年(614年)にいたるまで、隋の煬帝は総力を傾けて対高句麗戦にのぞみ、「遠交近攻」の原則にのっとって百済・新羅と連合し、小野妹子を通して「無礼」な国書を差し出した倭国に対しても寛容な態度で友好を求めた。しかし当時の百済は新羅と敵対関係にあり、表面上中国の出兵を支持するように見せながら、その実傍観の態度に終始し、隋軍が高句麗側と衝突した時も兵をとどめて動かず、隋に何の支援も与えなかった。結果煬帝の大遠征は惨憺たる失敗におわり、これによって隋王朝は間もなく滅亡した。

唐の太宗は貞観二十年(646年)に、自ら大軍を率いて高句麗に親征したが、向こうの守りはかたく、しぶとい抵抗を前に勝利をおさめることが出来なかった。この間、百済の義慈王は高句麗との連帯をさらに強め、機に乗じ新羅の多くの都市や町を侵攻するとともに、今までの方針をひるがえして、中国に対抗する態度をあからさまにした。したがって、唐はまず百済を滅ぼして高句麗の孤立化をはかろうという目論見を立てた。高宗の顯慶五年(660年)三月、唐の將軍蘇定方は海軍を率いて熊津江口にせまり、新羅の武烈王(金春秋)もまた、陸軍を率いてこれに加わった。同年八月に百済の首都泗沘(現在の忠清南道、扶餘の地にあたる)はあっけなく陥落してしまい、義慈王は捕らえられた。これに対し、倭国は義慈王の子豊璋を支持するため、海軍の船団を派遣して救援に赴いたが、白村江で敗北を喫して退いた。乾封元年(666年)九月、高句麗に発生した内乱に乗じた唐の高宗は、軍隊を発動し、文武王が派遣した新羅軍と共同戦線を組んで、乾封三年(668年)には高句麗の首都長安城(現在の平壤の市街地にあった)を陥落させ、宝蔵王をとりこにした。ここにいたって、百済の後に続いて高句麗も滅亡した。ここで序に本日の都城に関する講演の主題について言及したいのは、高句麗と百済の都城の建設に中国の都城の影響を受けたかどうかを別問題として、これらの都城の建築年代からみれば、唐の長安城および洛陽城の影響を受けた筈はないということである。

それからしばらくすると、高句麗の遺民が抗戦に立ちあがり、新羅も自国の利益をはかって唐軍と衝突するにいたった。新羅の対唐戦争は、文武王十六年(676年)までつづいていた。その結果、唐の勢力は朝鮮半島から撤退しなくななくなった。このように、殆ど半島全域を領有した「統一新羅」と呼ばれる強大な王朝(676-935年)は新しい姿で東アジアの歴史舞台に登場しはじめた。

新羅の都城は、一貫して現在の慶尚北道慶州市にあった。『三国史記』によれば、その初期の王宮は始祖赫居世二十一年(前37年)に築かれた金城である。その後婆娑尼師今はその二十二年(101年)に月城という王宮を金城の東南に造り、そこに移った。これらの伝説はそのまま信じられないと思うが、炤知麻立干九年(487年)七月に「月城を葺き」、翌年正月に明活城から「月城に移居した」という記載は確実なものといえよう。この月城の場所は、今日の慶州市街地の東南方にある半月形の丘陵のところに比定されている。『三国史記』の記載によれば、「統一新羅」を創立した文武王はその十四年(674年)に「宮内に池を穿って山を造り、花や草を植え、珍禽・奇獣を養った」記載中の「池」は、月城の東北方に位置する雁鴨池であったに違いない。池を「海」とみため、それに臨む宮殿は「臨海殿」という。『三国史記』孝昭王六年(697年)九月条に「群臣を臨海殿に宴す」とあるのはその初見だが、創建の時期は雁鴨池を造ってから遠くもない頃であつたろう。雁鴨池という名は後代のもので、その本名が

「月池」であったと研究者たちは『三国史記』職官志記載中の「月池典」や「月池嶽典」など東宮の官名を参照して、推定した。1975年から1976年に、雁鴨池の発掘調査は行われ、多大の収穫をあげた。

前にも述べたように、高宗の竜朔二年（662年）、唐長安城の北東部に大明宮という新しい宮城が完成し、その規模は太極宮にまさるとも劣らないものがあった。皇帝は大明宮に移り住んだため、太極宮に代わってここが京師の政治的中心としての役割をはたすようになった。大明宮では太液池と呼ばれる大きな池が穿たれて、池の中に蓬萊山という島が聳えていた。一昨年、中国社会科学院考古研究所の研究者たちは、太液池の遺跡を発掘している。私は新羅宮内の雁鴨池が大明宮の太液池にちなんで作られたものではないかと連想を禁じ得ない。

『三国史記』によれば、文武王六年（666年）から九年（669年）にかけて、新羅は金庾信の子三光と天存の子漢林を遣わし、唐の宮に宿衛を勤めさせ、それに大奈麻汁恒世を遣わして、唐の朝廷に朝貢させ、また唐の皇帝の命に従って、祇珍山級飡等を遣わし、唐に磁石を献上した。使者たちは大明宮に入って使命を果たしたのである。それ以前に金春秋の息子文注を始め、金仁問らが太極宮で唐の皇帝に仕える宿衛を勤めたこともあった。今度の金三光らは改めて大明宮で宿衛を勤めていたのだから、大明宮の状況を詳しく知っていた。特に文武王十四年（674年）正月、唐の大明宮で宿衛を勤めた大奈麻金徳福が新羅の都に帰って来た。此年の二月に文武王は苑池などを整備するにあたって、徳福の伝えた大明宮太液池の景観がその参考になる筈だと思う。以上は要するに、唐長安城が統一新羅の都に与えた影響の一例として、太液池と雁鴨池との関係を述べたのである。

『三国史記』によれば、月城は「王の住まわれる城」として「在城」という別名があり、8世紀以降の時期にもひきつづき王宮がここに置かれ、遺跡から発見された瓦片に「在城」の銘文もある。文武王十九年（679年）に創造した東宮が雁鴨池・臨海殿の宮殿を指すということは、発掘出土の木簡や墨書銘の土器に見える「洗宅」、「竜王（典）」などの東宮の職官名によって証明された。雁鴨池の本名が「月池」であるから、東宮の「月池宮」という別名も『三国史記』の記載に見られる。北宮という宮殿名は『三国遺事』恵恭王（765～780年）条に記されているが、『三国史記』では「王庭」とも称している。1939年に発掘調査した城東洞遺跡は、月城の真北に位置し、遺構や遺物から見れば、北宮の遺跡である可能性が高いと研究者たちは強調している。

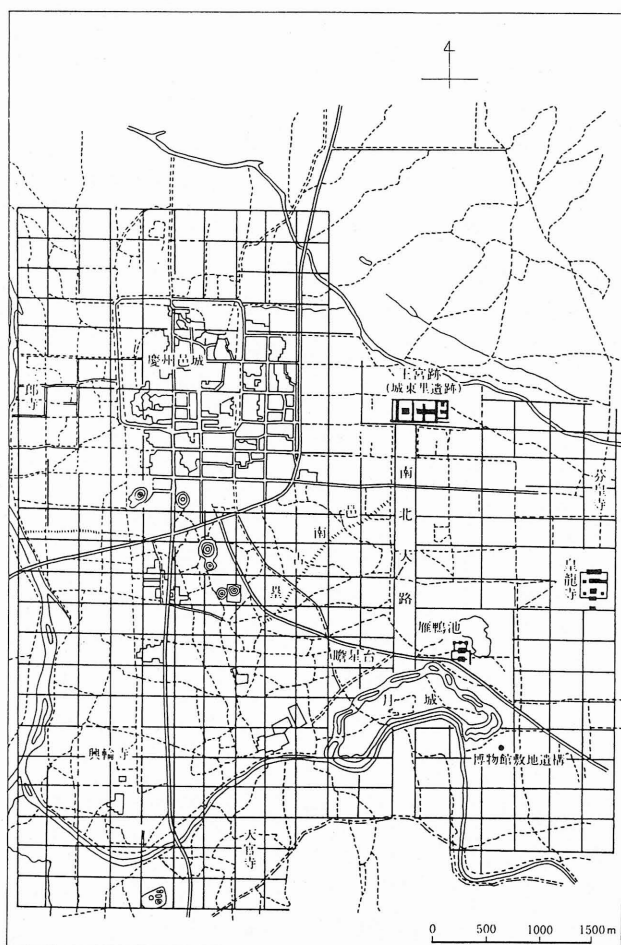
周知のように、真徳王三年（649年）新羅は唐の衣冠を採用し、翌四年（650年）にまた唐の「永徽」（650～655年）という年号を使用すると『三国史記』の本紀に記している。考古学者の発掘調査では、慶州市將軍路第1号墳、蔚州郡華山里第34号墳、釜山市華明堂第3号墳、公州邑熊津洞第29号墳、金海郡礼安里第49号墳など韓国の数多くの古墳から、7世紀中葉から末葉に製作した鉸具、巡方、丸柄、鉈尾などの銚帯金具が出土するとともに、慶州市普黄洞皇竜寺の遺跡や先程詳しく述べて来た慶州市仁旺洞の雁鴨池遺跡からも同じような銚帯金具が出土していた。また雁鴨池の発掘調査によって、「儀鳳四年」（679年）紀年銘の平瓦や「調露二年」（680年）紀年銘の塼が発見された。つまり、統一新羅の時期に至っても、衣冠や年号の採用などに代表される唐律令の受容は歴史書の記載だけではなく、考古学の発掘調査によっ

てもよく証明されたのである。そして7世紀後期から始まった宮殿の創建、都城の改造も唐律令の受容の一環として、唐の京師長安への模倣は当たり前だと考えられる。

『三国遺事』によれば、新羅全盛の時、都の中に「178936戸、1360坊、55里、35金入宅（富潤大宅）」があった。これは巻第一の辰韓条に見られる記載だが、その次の「四節遊宅」のくだりに明示しているように、実は憲康王（875-886年）在位期間を含む8世紀初めから9世紀末にいたる統一新羅時代の状況についての記述である。特にその巻第五の念佛師条の「360坊、17万戸」とあるのは確かに8世紀中葉の景德王（742-765年）時期の実況に関する記述なのである。もちろん、いくら全盛のときであっても、18万に近い戸数が明らかに誇張した数字に他ならないが、「1360坊」は「360坊」の誤記であり、むやみに捏造したものではない。『三

国史記』地理志に大昔の疑わしい始祖赫居世時期の情況として記された「35里」の数字と比べて、『三国遺事』の「55里」と言う数字は決して信憑性に乏しいものではない。

要するに、統一新羅時代における慶州の都全域は、まず55里に分けられ、さらに細かく360坊に分けられていたと認められる。「里」は日本の平城京などの都にある「坊」に相当し、「坊」は平城京の「坊」の中に細かく区画された「町」あるいは「坪」に相当するのである。ここに引用する「慶州の王京プランの復原」という図を参照すると、360坊と言いながら、月城の王宮・月池の東宮、それにその後創建した新宮である北宮（城東洞遺跡）が占める面積を除くと、復原された方格の地割は約330あり、これらは即ち「坊」である。55里は330坊に分けられ、里ごとに6坊を含んでいた筈である。また、この復原図から見れば、「坊」の平面の形が正方形であるのに対し、「里」の平面の形は東西に横長の長方形になり、長さとの比率は3：2である。このように、仮に「南北大路」の東側と西側の京城がそれぞれ「左京」・「右京」と呼ばれるならば、左京の幅はただ2里の長さに相当するが、右京の幅は倍増して4里の長さに



図三 尹武炳による慶州の王京プランの復原  
(佐藤興治によって一部加筆されたもの)

相当するのである。1976年から1983年に亘る遺跡の発掘調査によれば、大規模の伽藍であった皇竜寺は、左京中部の辺縁に位置し、その境内に4坊の面積が占められていたようである。

慶州の都は唐の長安城をモデルにして改造されたとは言うものの、原初的な時代の王都から律令制的な都城にいたるまで幾重にも重なっており、改造が困難なので日本の平城京・平安京のような左右対称的な整然たる条坊制の都城になり得なかったのである。また、周囲の明活山城・南山城・仙桃山城などの山城は首都を防衛する任務にあたっているから、改めて羅城を築く必要もなかったといえる。それにも拘わらず、日本の平城京・平安京と同様に慶州の都は「都城」と呼ぶべきものである。

## 【要旨】

7世紀90年代に建設された日本の藤原京は、後の8世紀の平城京ならびに8世紀90年代以降の平安京と同じく、中国の唐時代（618～907年）の都長安城および洛陽城を模倣して形作られたものであり、北魏王朝（386～534年）の都洛陽への模倣ではない。

開皇二年（582年）隋の文帝は、前漢時代以来の歴代の都だった長安の東南方に新しく「大興」という都城を造営して、京師と称した。大業元年（605年）隋の煬帝は、久しく打ち捨てられていた北魏の洛陽城跡の西に新たな都を営み、「東都」と称された。唐王朝が隋の後に樹立され、京師大興を「長安」という名に変えたが、東都洛陽の名称は従来のものであった。唐の太宗の貞観四年（630年）から文宗の開成三年（838年）までの間、日本からの正式な遣唐使の派遣は十三回もあったが、その内十一回の訪問地はまず長安であった。とはいえ、洛陽は長安の東に位置するため、遣唐使の行き来が洛陽を経由するので、立ち寄りたりしていたはずである。小野妹子らの遣隋使につづいて派遣された遣唐使は、才識に満ちた留学生や学問僧を率いて中国を訪れ、唐の都城制度を含め、当時の中国の政治、経済、宗教及び様々な文化事業について考察を行った。言うまでもなく、日本の都城の建築様式は主として唐長安城を模倣したが、また唐洛陽城をも模倣したのである。

唐長安城全体のプランが東西に横長の長方形であるのに対し、平城京など日本の都城は南北に縦長の長方形である。長安ではほとんどの坊の平面の形は東西方向に長い長方形であるが、日本の都城では、すべての坊の平面は正方形をしている。これらの唐長安城と違うところは唐洛陽城にその共通点が見られる。平安時代に入ってから、唐洛陽城は平安京の形状や街区構成になお影響力を持っていた。平安京では、洛陽の数多くの坊名などを採用されたばかりでなく、「洛陽」という名称が平安京の代名詞に使われるほどであった。これは中日両国交流史上の美談として伝えられるものである。

高句麗と百済の都城の建設にどの程度で中国都城の影響を受けたかを別問題として、都城の建築年代からみれば、唐の長安城および洛陽城の影響を受けた筈はない。

新羅の都城は、一貫して現在の慶州市にあった。「統一新羅」（676～935年）を創立した文武王はその十四年（674年）に「宮内に池を穿って山を造り、花や草を植え、珍禽・奇獣を養った」記載中の「池」は、すなわち月城の東北方に位置する雁鴨池であった。筆者は細かい考証の上で、雁鴨池が唐長安城大明

宮の太液池にちなんで作られたものではないかと推測する。

7世紀40年代の真徳王の時から70年代以降の統一新羅の時代に至るまで、衣冠や年号の採用などに代表される唐律令の受容は歴史書の記載だけではなく、考古学の発掘調査によってもよく証明された。そして7世紀後期から始まった宮殿の創建、都城の改造も唐律令の受容の一環として、唐の京師長安城への模倣は当たり前だと考えられる。